

カナダの

クラシック音楽界

堤 剛

カナダの音楽界は、歴史的に見てヨーロッパ、アメリカとの関係がとて深いのだが、最近では日本との交流も随分盛んになってきた。

これを書いている時点（五月六日）でも、指揮者のV・フェルドブルル氏が東京芸術大学の客員教授として滞在しており、ピアニストのA・ラブラント氏、それにカナディアン・ブラスの面々が、日本各地で演奏会を開いている。また八月には、トロント大学のL・フェニベシユ教授の来日も予定されている。V・フェルドブルル氏は三回目、カナディアン・ブラスは二回目の来日で、カナダ人の音楽家が次第に日本の聴衆の間でポピュラーになりつつあることをよく示している。

ちなみに、カナダ人演奏家で一番最初に日本へ演奏旅行に来たのはキャスリーン・パローウという女流バイオリニストで、彼女の優雅で華麗な演奏は、当時（戦前）の日本の聴衆をうならせたといえられている。

これまでに日本を訪れたことのあるカナダの演奏家は数多い。オーケストラではス・メータ指揮のモンテリオール、小沢征爾指揮のトロント、秋山和慶指揮の

バンクーバーの各交響楽団、オルガン奏者のH・マックレーン、ピアニストのR・トゥリーニ、バイオリニストのS・スタリック、ビオラ奏者のG・スタニツク、フルート奏者のR・エイトキン、ファゴット奏者のG・ズッカーマン、それにコントラアルトのM・フォレスト、また室内楽の分野ではクワルテット・カナダ、リリックアーツ・トリオなどが特に記憶に残っている。

まだ日本を訪れたことのない著名な演奏家（団体）としては、国際的に押しも押されぬ地位を築き上げたオタワの国立芸術センター交響楽団と、そのオーケストラを発足当初から現在の位置まで引張ってきた音楽監督兼指揮者のM・ベルナルデイ、室内合奏団ではモンテリオールを中心に活躍しているマックギル室内合奏団、常に高い評価を得ているトロント室内合奏団等があげられよう。

最近とみに充実してきているトロントのカナディアン・オペラの将来も楽しみだが、それ以上に日本の聴衆にアッピールしそうなものは、オーフォード弦楽四重奏団。忙がしい演奏活動の合い間をさいてトロント大学で教えるほか、各地でマス

ター・クラスを開いて積極的に多くの人と交流を図る彼らの姿勢は、高い演奏水準とあいまって聴衆の幅広い支持を受ける大きな理由となっている。

夏の間には、カナダ各地で幾つかの音楽祭が催されるが、スケールの大きさ、水準の高さで頭抜けているのは、バンフ、ビクトリア、ゲェルフ、ストラットフォードの音楽祭。バンフとビクトリアは、並行して夏期講習も行っており、その参加者もなかなか国際的。ストラットフォードの方は、音楽よりも演劇の部門の方が歴史も長く、よく知られているが、音楽会の方もE・タウシツク氏の努力により内容、規模共に毎年充実している。

カナダの音楽事情を語る時に、CBC（カナダ国営放送）の占める役割を忘れてはならない。CBCは、全国にある支局を通じて、各地域の音楽文化の発展、向上に積極的に参加しているからである。公開録音の形で数多くの音楽会を主催するだけでなく、大きな支局に



トロント交響楽団

なると専属のオーケストラさえも持っている。それに毎年行われるCBC音楽コンクールは、カナダの若い音楽家にとって大事な登竜門になっており、各部門とも参加者が毎回増えている。

カナダの音楽家にとって、カナダ・カウンスル及び各州のアーツ・カウンスルの援助も無視出来ない。日本にはこの種の組織がないが、簡単に言えば、連邦政府や州政府の外郭団体で、芸術振興評議会とでも訳したらいいだろうか。これらの評議会からの援助はまことに多方面にわたっており、音楽だけをとってみても、各オーケストラに対する助成、音楽学校など教育機関に対する助成、作品の委嘱並びに発表に対する援助、演奏家に対する各種の援助などがあげられる。その選定は、あくまで実力本位で、公正を期しているのはもちろんである。援助は、外国から音楽家を招聘するような場合にも与えられ、最近では作曲家の間宮芳生氏がカナダ・カウンスルの援助でウエスタン・オンタリオ大学に客員教授として迎えられた。

国全体としてもそうなのだろうが、音楽の分野においてもカナダは素晴らしい将来性を秘めている。これは最近の若い音楽家たちの目覚ましい活躍によりよく表われている。よく整備され、充実した教育のシステムに加えて、芸術を何とか育てて行こうとする気持ちを強くもっている一般市民が、それを助けていることは疑いない。（ウエスタン・オンタリオ大学準教授・チェリスト）